

武道と禅

# 小川忠太郎範士

## 『稽古日誌』(一)

小川 心耕

父(無得庵小川刀耕老居士)の戦前の剣道修行中の稽古日誌をご紹介します。宏道会はじめ父の剣道修行に関心のある方のご参考になれば幸いです。昭和16年当時、父40歳(注1)、持田盛二先生56歳(注2)でした。

### 『稽古日誌』

昭和16年

12月18日、講談社にて持田先生に願う。

一足一刀にて切先を利かせること(引身本覚の手の内)、之は先生には利かぬ。即、之が利く人は自分より下だ。自分は先生の間に入れぬ。先生も亦余の構えくづせぬ。余が突こうとして気の止まったところを小手を打たる。稽古後余の左拳が疲れている。それは無理な力の入る証拠だ。

12月20日、持田先生に願う。

一足一刀では一昨日より余裕生まる。即、前後左右を見て願う。但し近間で技をかけられると迷う。余之



小川忠太郎範士(昭和10年)

を質問す。先生曰く、「迷うのは近間だがあんな事は何でもない、ずーっと入ってしまうか又は相手の切先を抑えて引いてもよい。相手に攻められた場合、ずーっと真直ぐに手を伸ばして技に変わってしまった方がよい。下段に下げるよりもその方がよい。但し無構えで切先は外れていても気が先になっていれば差支えないが、それでも困りはあった方がよい。一つ癖を直すと又別の方に別の癖がつく、これを直すと又別のが出る、そうして段々穴が少なくなっていくのである、そうして癖を直していくと、見ている人もその稽古に感心するようになり、それが教育になるのである。稽古は打たれるところをよく考えるという事が大事だ。そこには自分に欠点がある、穴がある、そこを直していくのである。自分は以前柄が長かった、相手が技を出すと長身を利用して構えを外したが、そこを思い切って横面に伸びられると打たれた、稽古は引いても切先を外してはいかぬ、剣道は打つも打たるも紙一重のところだ。」

12月21日、持田先生に願う。

本日は切先を外さぬ事、近間では押えて引く稽古をす。<sup>すこぶ</sup>願うらくであった。

余が左拳について問うと先生曰く、「あなたはたいへんよくなった。気分は張っているからよい、左拳の位置はあまり低くない方がよい、手の内は小手をつけてみると分る、小手と手の間に隙の出来る者は手の内は悪い、左拳が中心を外れずに上下に拍子をとる事はよい、また切先は外れていてもよいが気が引けていなければよい。」余言う、「先生に対し先



持田盛二範士（『百回稽古』より）。  
写真提供：体育とスポーツ出版社）

々と技を出すように心掛けています。」先生曰く、「気分が何時も先々となっている事が大事、お互いは常に下手を受けているからつい引き受ける稽古の癖がついてしまう、それで講談社では強い者がかかってくるから自分は先々とする、剣道は立ち上がってみれば大抵分かる、表のみから攻める人がある、即、表の強い人である、かかる人は必ず裏が弱いから裏を張って片手突にいくとかする、相手の弱点を見て相手の弱点を攻めること。」

12月25日、持田先生に願う。

両刃交鋒、余が切先を下げてぐっと攻めると先生は余の切先をぼんと打つ（之は定石だ）余が突に行くとき相突の先にて突かる、この技二本。余が引いて大きく冠って面に伸びると之も利生突。本日は余が先々と技を出す。

12月26日、持田先生に願う。（本日は雨）

最後の方に至り余先生の太刀を軽く抑へて入り身となる。先生の気が一寸とまる、そこを思わず大きく振り冠り飛び込んで正面打、先生は参ったという。

12月30日、持田先生に願う。

互に切先攻め合い互に生きている、入れぬ、近間となり余突に入る、あたらぬ。相手を引き込む事に気付き、それから技はぐんぐん出るが相手の構が生きているからあたらぬ、最後に死の間にぐっと入る、そこを先生より小手を打たる、もう一本攻めて死の間に入る、先生の気が留る、ぎりぎりの間で小手を打つ、先生 参ったという。剣道はここだ、打つところが打たれるところ 打たれるところは打つところ。

12月31日、持田先生に願う。

（腹力で願う）一足一刀では不十分、先生より面と小手が来たが余の気分は崩れぬ、近間で余が小手を一本打つ、先生 参ったと言う。

持田先生に願い感、剣道は直真陰流の努力呼吸、即、腹力が本、それに一刀流の組太刀が参考になる。

昭和17年

2月3日、国士館朝稽古にて斎村先生（注3）に願う。

斎村先生は立ち上り一足一刀の間に対すると、そこから先ず正しくは来ない、先ず間を外す、ここに用心がいる。故に立ち上がったら半歩退いて先生を観る事、之が大事。

稽古前の工夫、呼吸は法定形、切先は一刀流の順皮、之は前後左右、立ち上がり、両刃交鋒、しばし前後左右殊に左右に間をとる、互に打ち間に入れぬ、初太刀は互に不十分、近間では余は先生の太刀を表よりおさえる、先生は入れぬ、得意のかつぎ面に一本伸びようとしたが余が先生の太刀を抑えているので伸びられぬ、先生は裏より巻いてくる、余は之を表に抜く、（余は表に抜き突に入ればそこから技が出るのだが突に入らなかった、之は失敗。先生は裏より入り突、小手と攻めるが不十分）互に一足一刀となる、余は腹力がぬけると左足をどんと突く、それで足腰がきまる。余が大きく振り冠って入ろうとすると先生は先の気分、相打の突が利いているので大きく冠れぬ、半歩引いて大きく伸びようとしても先生はついて来ない。右横面に一本伸びたが之は無理の技だ。

その中、余に突で破れという考がぴんと浮かぶ、一足一刀で先生の裏が見えた時ぐーっと裏突一本入る、先生は参ったと言う。それから互に遠間、余は心気があがる。

斎村先生評「……あれでよい、柔らかくなったからよい、一本突かれたがあの時は自分の気が止まった。剣道は間合と気分だ。技なぞは程度がある。」

近間の入る入られぬ所を評し、「あれでよい、石に綿 綿に石で行く事が大事。」

余曰く、「真剣であるからそう簡単には技は出せぬ。」

先生曰く、「そーだ、なんとかして打とうとする、竹刀ではあたっ

でもその心境では真剣ではそんな技は出ない、だめになる。」

3月3日、講談社にて持田先生に願う。

抜順皮の間合にて願う。

両刃交鋒、二三合の打ち合い互に不十分、その中余の切先ゆるみ左右の手足が放心となり目がちかちかしてくる、之は先生の気合に負けたのだ、之ではいかぬと先生の太刀先を表をチャチャン裏へチャンと払う、先生の太刀先を散らす、之は成功、余の切先生きかえる、技も生まる、表より攻め先生が一寸気の引けた所を真面に伸びる、先生は参ったと言う。それから軽い面に伸びると不十分のところを打ったあとを右小手を抑えられる、この技が数本あり。

3月9日、持田先生に願う。

抜順皮の間と切っ先は散らす。両刃交鋒、先生はジューツと見ている。余は右又は左より抑えてみる、先生はこれにせず、互いに技が出ぬ、先生より小手が軽くも二本来た、切先四五寸合わした所では余が先生の切先を散らすので互いに技が出ぬ、余は攻勢に出ている積りだが先生はくずれず却って攻勢、面とか突とかに出る、余は出にくい、どこからも余には入れぬ、之が前半。

後半...前半は心も構えも崩れぬ、しこうして絶対の間に入り技が出ない、動きがつかぬ、そこで考えをかえた、打てという心境と成る、すると心が軽くなり相手が見え技が出る、軽い小手抑えて面にも。即盛り返して来たのだ。

今日の稽古は失敗、但し中半で考えをかえた事は成功。

3月17日、持田先生に願う。

5日間大中寺にて坐禅しての剣。ふんばる腹力と現在の一本の境界にて願う。

両刃交鋒、無心、先生が出れば余の切先は自然に先生の腹を攻める、余が出れば先生の切先は余の腹を攻めるので出られぬ。途中先生が「見えて来たな」と言う。坐禅では境界と切先とはよくなるが足が伴わぬ。

一足一刀にては片手突が来る、軽い小手が来る、余に打たんとする一念発した時先生が打つと見せて色でわり胴を打つ、之は三本打たる。

感（3月9日、3月17日の日は持田先生に一本もあたらぬ、それは先生が余の剣、即相討の気合を呑み込んだのだ、反対に先生の剣もあたらぬ、今後は持田先生の相討の気をどう破るかが問題、之は技ではだめ、気合でもだめ。相打の極意、即平常心でなければだめ。剣道は相手の長所、欠点を早く見付けて善処する者が勝也。体力に非ず 一眼也。）。

（つづく）

（注1）小川忠太郎（1901～1992）剣道範士九段。小川範士の略歴は、本号77頁に紹介されている。

（注2）持田盛二（1885～1974）剣道範士十段。警視庁剣道名誉師範。講談社野間道場師範。小川範士が師として最も尊敬された剣道家である。昭和29年～同36年、持田範士の申し入れにより同範士と小川範士との百回稽古が行われた。

（注3）斎村五郎（1887～1969）剣道範士十段。国士館専門学校剣道科教授。警視庁剣道名誉師範。小川範士が尊敬された剣道家である。

## 著者プロフィール



小川心耕（本名／昭）

昭和10年、東京生まれ。慶応大学経済学部卒。明治生命勤務。在職中に清和剣友会（巣鴨）創設、少年剣道指導に当たる。定年退職後、（財）ダイヤ高齢社会研究財団認定エアロビック・インストラクターとして高齢者の健康・生きがいづくりに従事。平成22年、人間禅丸川春潭老師に入門。